

The King in search of a queen. 王様のお妃えらび

(Jamyang Tshering 著 樋口恵一 訳 杉本聖奈 絵)

常に誰にでも親切にしましょう。

われわれはいつ誰に会い、
運命がどうなるのか分からないのです。



むかしむかしブータン西部、シャーと呼ばれる地域に住む王様がいました。現在ワンドゥー・フォドラン（Wangdue Phodrang）と言われている地区です。王様はとてもハンサムで魅力があり、優しい領主でした。領民のみならず外からもいろいろな人が、彼ら彼女達の娘をお妃にしてみようとうと、毎日のようにお城を訪れました。王様は結婚したい気持ちは持っていました。単に美しいだけでなく、内面も美しい人と結婚したいと思っていました。お妃となる人は王様と同様に慈悲深く優しい人であってほしいと考えていたのです。

ある晴れた日、王様は猟が上手な二人の家来を連れて狩りに出かけることにしました。狩りをしている最中、二人の家来は王様がどんなお妃を求めているのか聞いてみることにしました。王様は以前答えたのと同様に、自分よりも他の人々のことを大切に考える人をお妃に欲しいと彼らに話しました。さらに、親切であるばかりでなく、王様と領民のためにあるような人が欲しいとも語りました。家来はお互いに顔を見合せて、道中二人の頭に浮かんだ三姉妹がとても親切で美しい人達だと王様に話すことにしました。二人は三姉妹に会ったことはないのですが、王様に対しての思いからこの話しをすることにしました。

三姉妹は質素な暮らしをしている家を出で、王様が一人をお妃に迎えることと決めたとしても、失うものは何一つありませんでした。二人が三姉妹について王様に話しをしたところ、驚いたことに王様は三人に会うことに興味を持たれたようでした。二人は三姉妹を探すために王様に同行することを申し出ましたが王様はこれを認めず、一人で行くとおっしゃったので、ご意思に従うことにしました。

王様は領民や二人の家来が全く知らない特別な能力をもっていました。それは自分がそうしたいと思うときに姿・形を変えられるという能力でした。三姉妹を探す中、王様は自身の姿を犬に変えました。普通の犬がご主人様に忠実であるように、野良犬に対して三姉妹が誠実で親切である姿を見たかったのです。

王様は何日も犬の姿をして歩き回り、ようやく目的地にたどり着きました。王様は最上級の米も一緒に持ってきていました。

三姉妹に会う前、川で着物を洗っている三姉妹の母親に出会いました。王様は母親に近づいて袋に入った米を渡し、戻ってくるまで預かってほしいと話しました。頼みを聞いて母親は何時間も待っていましたが、犬は戻ってきませんでした。もうこれ以上待てないので、彼女は家に帰ることにして、帰宅してからこのことを夫に話しました。夫は話にあまり興味も沸かず、妻から貴重な米を取り上げ、お酒を造り始めました。と、突然犬が彼らの前に現れました。王様はこういうことが起こると分かっていて、彼らに罰を与えるのではなく、彼を裏切ったお詫びに長女を譲ってくれと両親に頼みました。これにはさすがに驚いた二人ですが、両親は犬の希望を受け入れ、長女を犬の妻として差し出すことにしました。

次の日、犬は長女を妻として迎えました。長女がどのくらい慈悲深いかを試すため、犬は彼女と一緒に川を渡ることにしました。川を渡るのに背中に乗せてもらいたいのか長女に聞いたところ、二つ返事で彼女と荷物を背中に乗せてもらいたいと答えてきました。

犬は彼女を背に乗せて小さな小屋に到着し、1日をそこで過ごしました。犬は彼女が美味しい食事を作る様子を見ましたが、残念なことに彼女はそれを全部一人で食べてしまい、彼には残り物の骨しかくれませんでした。床につく時間になると、長女は自分のために布団を取り出し、夫に寝る場所すら示さずにさっさと寝てしまいました。彼女はお妃にふさわしくないと王様は思いました。



王様は長女を家に戻すことにしました。無事に家に戻ると、犬は姉とは違うか確かめたいので次女を差し出してほしいと頼みました。両親は同意して、王様は同じ旅を次女と共に再び始めました。

川に到着すると、犬は次女に対して同じ質問をしましたが、彼女は背中に乗せてもらうことを遠慮し、持ち物だけを持ってもらいたいと言いました。

二人は小さな小屋に到着し、夕食の準備を始めました。彼女は犬に対していくらか食べ物を与えましたが、自分は食事と一緒にお酒を飲み出しました。王様は彼女の性格について疑問を持ちました。

床につく時間になると、彼女はぼろきれを渡してこれに寝るように言い、自分は温かいふかふかの布団で寝てしまいました。王様は、次女も長女同様お妃にふさわしくないと思いました。



もう大した望みはないと思いながらも、王様は両親に対して三女を妻として差し出すよう依頼しました。ここまでくると、三女に対して期待ゼロです。長女と次女は犬に対して何の尊敬も感心も寄せてくれなかったのですから。

三女と犬は以前と同様に旅を始めましたが、今回三女は川を渡る際に背中に乗せて欲しいとは言いませんでした。さらに彼女は自ら荷物も持って歩き、二人は小屋に到着したのです。

二人の姉と違い、三女は道中ずっと自分の生い立ちなどを話しました。夕食時になると、犬に対して特別な食事を用意し、食事中もいろいろな話しをしてくれました。王様にとって楽しい時間を過ごさせてくれ、慈悲と優しい気持ちを示してくれました。床につく時間になると、犬が布団で快適に眠れるようにしてくれ、彼女はぼろきれを床に敷いただけで寝てしまいました。



王様は遂にお妃を見つけたと確信し、犬の姿から元の自分の姿に戻りました。ビックリして信じられないと思いながらも三女は王様に敬意を払い、お妃になることを受け入れてくれました。その後お二人は幸せに暮らされたということです。

おしまい